

2010年3月19日

1. 背景・経緯：ア克拉までからア克拉以後

- ・ CSO の開発効果議論が進んできている。
- ・ 南の CSOs の援助効果に対する関心が高まっている。
- ・ 新しいアクター（新興国、民間ファンドなど）の巻き込みが喫緊の課題。
- ・ 国連（Development Cooperation Forum）の参加で、マルチ・ステークホルダー・プラットフォームができた。
- ・ 新しい援助体系（Aid Architecture）についての議論が高まり始めている。
- ・ 議論されていない課題（コンディショナリティ、環境、ジェンダー、人権、etc.）がある。

2. NGO と外務省で意見交換を行う意義

- ・ ソウル HLF-4 において、日本は重要な役割を果たし得るはず？
- ・ 世界の援助体系において、アジアが持つ意味は小さくない。また、日本への期待も大きい？
- ・ パリ宣言に一定の距離をおいてきた日本は、HLF-4 でどのような議論を展開すべきか？
- ・ 「新しい援助体系」についての議論が喧しいが、日本はどのような議論を主導するのか？
- ・ ポスト HLFIV を日本はどのように主導していこうとするのか？
- ・ 「開発効果（Development Effectiveness）」を議論するためにどのような議論枠組みが適切か？
- ・ DCF における議論を日本はどのように主導すべきか？
- ・ 国内でどのような議論枠組みを設定すべきか？また、その際に議論の仕方は？

3. 議題案

1. 検証と分析

- ・ パリ宣言とモニタリングの進捗状況
- ・ Working Party on Aid Effectiveness (Strengthen and use country systems / Enhance ownership and accountability for development policies / Improve division of labour / Increase the predictability of aid flows / Work with new donors / Promote south-south co-operation / Improve transparency / Deliver results) での議論について
- ・ AAA の意義の確認とア克拉以後の評価：「援助効果向上から開発効果に向けて」

2. HLF-4 に向けた課題

- ・ 「新しい援助体系（Aid Architecture）」について
- ・ 新しい課題（人権、環境、ジェンダーなど）について
- ・ アカウンタビリティと民主的オーナーシップについて
- ・ CSO 開発効果について
- ・ 新しいアクター（新興国や民間ファンド、企業との連携）について

3. ポスト・ソウルに向けて

- ・ 議論枠組みの可能性と限界：OECD と Development Cooperation Forum (DCF)
- ・ 持続可能性と経済成長の再考

Diagram 1: From the Millennium Summit to Accra: Reshaping the international aid architecture

